

彼は音楽の詩人である。

彼がピアノに向かって即興演奏する時、人々は彼がモーツァルトの、ラファエロの、ゲーテの国の血をひいていることに気がつく。

彼の真の祖国は詩の国であり、夢の国である。

ハインリッヒ・ハイネ (1797-1856)

ショパンは、祝福さるべき着想を得て、彼の第二協奏曲からアダージョを聴かせてくれた。情熱な楽章の間に挟まれたこの緩徐楽章は、愛らしい魅力を深遠な信仰的思想に結び付けることで、人々をある具体的な喜びの——つまり、誰一人として経験したことのない、穏やかな恍惚——という喜びの——虜にした。このような効果は、大半の協奏曲の中間部に存在する、ただ長々としているだけのアダージョからは、絶対に生じえない。

しかも、彼の緩徐楽章には、信じられないほどの生き生きとした想像力が、素朴な魅力とともに、充満していた。だから、ついに ——黄金の壺の中に落とされる真珠の玉のごとく ——その最後の音が奏でられたときにも、聴衆は黙想をやめることなくじっと聴き続けたままでいて、しばしの間、喝采を送りたい気持ちをこらえていたのであった。我々は今、たそがれの神秘的薄明りのなかで、ちょうどこの時の聴衆のように、静かに、暗闇に立ちつくしている。光が消えて間もない、地平線上の一点を見つめながら。

ウクトル・ベルリオーズ (1803-1869)

*ベルリオーズのこのショパンの協奏曲第2番の演奏評を体現したのが、2005年、80歳の
ルース・スレンチェンスカの岡山シンフォニーホールでの演奏。

劉生容記念館出版(LiuMAER)の「ルース・スレンチェンスカの芸術」Vol.10 で聴けます。

音楽はショパンにとっての言語だった。彼はその神の言葉を用いて、少数の人だけが理解することができる繊細な情緒を、隅々まで表現した。

ショパンは大きな熱狂ではなく繊細な共感を求めていた。….

ショパンのどの曲も天才の作品の特徴である、自由な発想と威厳ある表現に満ちあふれているのだ。….

価値に見合わないほどの世評を得る人がいる一方で、一部の音楽家が過小に評価され続けている。….

ショパンは誰のことも羨ましく思っていない。きっと彼は知っているのだらう。一人の芸術家が感じる満足のうちでもっとも気高く正当なものは、自分の名声よりも優れ、自らの成功よりも卓越し、自らの栄光よりも偉大であると確信することなのだ。

1841年5月 フランツ・リスト(1811~1886)